

# 敵中横断三百里

—— 映画文学人生論

原作：山中峯太郎（1926年）「少年倶楽部」

監督：森一生(1957年)

出演：建川斥候隊長 菅原謙二 脚色：黒澤明 小国英雄  
豊吉斥候隊員 北原義郎 撮影：高橋通一  
大竹斥候隊員 高松映郎 音楽：鈴木静一  
沼田斥候隊員 石井竜一 橋口特務機関長 根上淳

騎兵の生命は馬だ。中尉は五名を選ぶと、次に五頭の駿馬を選び出した。

映画『日露戦争勝利の秘史 敵中横断三百里』を観て、少年時代の「血湧き肉躍る」体験の記憶がよみがえった。実家の押入れにあった山中峯太郎の原作を読んで興奮した思い出がある。

私が軍国少年だったわけではない。読んだのは昭和二十年代の半ばのことで、日本は憲法で戦争を放棄していた。それに、実家では馬を飼っていたが、私はその馬にも乗れない臆病者だ。そんな少年にも「血湧き肉躍る」思いをさせた事実からも昭和十年代から二十年代にかけて『敵中横断三百里』がはたした影響力の大きさが想像できる。

確認してみると、この実録冒険小説は雑誌「少年倶楽部」に昭和五年四月号から九月号まで連載されている。日露戦争で秋山騎兵团騎兵第九連隊の建川美次中尉が五名の騎兵を率いてロシア軍の後方深く潜入し、機密情報の入手に成功して、奉天の大会戦で日本軍を勝利に導いたという筋だ。

重要な機密情報とは、クロパトキン総司令官が率いるロシア軍が奉天から総攻撃してくるか、それとも北の鐵嶺へ退却して鐵嶺から最後の総攻撃を断行するかを見きわめること——それがわかれば、日本軍は奉天か鐵嶺か、いずれか一方に兵力を集中して決戦に挑むことができる。

秘密命令は総司令官の大山巖元帥より騎兵团長の秋山好古少将へ、秋山少将より第九連隊の平佐



# 敵中横断三百里

映画文学人生論

連隊長へ、平佐中佐から建川中尉に伝えられた。

命令を受けた建川中尉は武者振るいして、行動を開始する。騎兵の生命は馬だ。中尉は同行する五人を選ぶと、次に五頭の駿馬を選びだした。ロシア軍に見せかけるため白馬を一頭連れて行く。その白馬には沼田一等卒が乗ることになった。

斥候隊は敵の馬賊やコサツク兵と遭遇したり、吹雪に苦しめられたりしながら、やっと鐵嶺の市街に入り込んで、ロシア軍が汽車で奉天へ向けて続々と南下しているのを確認した。

ロシア軍が鉄嶺からではなく、奉天から総攻撃する作戦をたてていることはあきらかだ。そのみきわめはついたが、帰途、コサツク騎兵隊に執拗な追跡を受ける。沼田一等卒は銃弾に撃たれてしまったが、見棄てるしかない。

ようやく、建川中尉ほか四名は無事生還し、機密情報を総司令部に報告した。大殊勲という功績で、六人全員が名誉の金鷄勲章を賜った。ロシア軍の捕虜になった沼田一等卒を含めて。

日露戦争の頃は捕虜になっても、名誉が挽回できたことがこの事実からわかる。「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓が示達されたのは昭和十六年一月になってからだ。建川中尉は参謀本部第一部長、駐ソ大使などの要職を経て、昭和二十年九月に逝去した。

天高く馬肥ゆる秋すぎて冬